あたしは無理

魔法少女リリカルなのは
アリサ×なのは小説本
バーニングアリサ序章？

PARALLEL ACT

あたしは無理

目次

第1章 4

第2章 10

第3章 14

あとがき 21

第1章

1

地球の、なのは達と同じ小学校に通い初めて暫く経つ。学校に行くのは初めてなので、何もかもが新鮮だ。こんなに沢山の同じ年代の子供と過ごすのもそうだし、国語も、社会も初めて聞く内容ばかり。漢字は難しいけど。ただ、算数の授業は簡単すぎてつまらない。リニスが教えてくれた数学はもっと高度だったから。

休み時間に他の子達を見ていると、二人で教室を出ていくのを見かける。一体何をしに行くんだろう？　ほら、今もまた。

「どうしたの？　フェイトちゃん」

いつもの三人がフェイトの机を囲む中、すずかはフェイトが明後日の方向を見ていることに気づいた。

「あの二人、どこに行くんだろう？」

そう言って、フェイトは教室の出口を指さした。

「他にも、よく二人で出ていくのを見るんだけど」

「あぁ……」

三人は皆思い当たる節（ふし）があるようだ。

「あれはね、おトイレよ」

「トイレ？」

フェイトは首を傾げる。今までトイレは一人でしか行ったことがない。そりゃ小さい頃はリニスに手伝ってて貰った事はあったけど。

「仲良い娘はね、一緒にトイレに行ったりするの」

「そういうものなの？」

地球には面白い風習があるものだ。

「じゃあ、なのはやすずか達も一緒にトイレに行くの？」

「ん～　たまに行くかなぁ」

「そうなんだ……」

じゃあ、やっぱり私も一緒にトイレに行った方が良いのかな？　でも、仲が良いのが前提みたいだし。断られたら仲が良くないって事なのかな？　誘ったら、一緒に行ってくれるかな？　それとも、誘ってくれるのを待っていた方が良いのかな？　自分から言うと、自意識過剰みたいだし。でも、やっぱり積極的に行かないと……

「ま、あたしは連れションなんてしないけどね」

アリサの声は、フェイトには聞こえていないようだった。

そして、次の授業のチャイムが鳴った。

その次の休み時間、フェイトは緊張で尿意を催さなかった。しかし、次の休み時間は流石に溜まってきた。

「あ、あの、トイレ行かない？」

フェイトは今までの時間悩んでいたことを、勇気を振り絞って提案しようとする。だが、恥ずかしさと、不安と、自信の無さからその声はとても小さい。

「え？　何？　聞こえない」

「ト、トイレ……　一緒に……」

「もう、もっと大きな声で言わないと！」

フェイトは意を決する。

「トイレ、一緒に行かない⁉」

「……」

フェイトの叫びに教室が静まり返る。その大声と、何より内容で教室中の視線がフェイトに集まる。フェイトの顔が真っ赤になる。その叫びを間近で聞いたなのは達も赤くなる。苦笑するしかない。

「……!!」

フェイトは居た堪れなくなって教室を飛び出す。その後をなのはが追う。

「あんなに我慢してたのか」

「漏らすなよ」

そう言った男子をアリサはキッ！　と睨み付けた。

暫くして、なのはがフェイトを連れて帰ってきた。恥ずかしい科白を言って、教室に入り辛そうにしているフェイトの手を、なのはが無理やり引っ張って。

顔を赤くしてモジモジしているフェイトと、その手を握るなのは、とても仲睦(むつ)まじく見えた。

2

イライラする。なんでか分からない。何だかとってもイライラする！

フェイト連れション事件の後、なのはとフェイトは前にもまして仲が良くなった。事ある毎に手を繋いだり、腕を組んだり、どこに行くにも一緒にいたり、いちゃいちゃ、いちゃいちゃ、いちゃいちゃ！　している。

気に入らない。なんでそんなに一緒にいるの？　少しは自分一人で行動しろっての。

「アリサ……　アリサ……」
「えっ⁉　何？」
アリサが我に返ると、フェイトが心配そうな顔をして覗き込んでいる。どうやら、ぼ～っとしていたらしい。
「な、なんでもないわよ」
「そう、それならいいけど」
アリサはそ知らぬ顔で、ジュースのパックにストローを差し込む。今は昼休み、四人でお弁当を食べるため、集まっていた。
「キャッ！」
フェイトの顔にジュースがかかる。パックの「角」じゃなくて、「面」を持ってストローを挿したために、中身が飛び出てしまったらしい。
（ふん。好(い)い気味……）
少し気分がすっとする。いちゃいちゃしてた罰(ばち)が当ったんだ。
（あれ？　あたし……）
なんで喜んでんの？
フェイトは友達だ。その友達の災難を喜んでる？
（最低……）
友達の災難を喜ぶなんて、最低だ。どうしてこんな事を考えてしまったんだろう？
「もう、駄目だよフェイトちゃん。ストローを挿す時は、端っこ持たなくちゃ」
「うん、気をつけるよ」
なのはがフェイトの顔をハンカチで拭く。とても仲睦ましい。その様子を見て、またイライラしてきた。
「もう！　いちゃいちゃしない⁉」

3

とある日の放課後、いつもの四人は商店街を歩いていた。福引きの券が溜まったので、引きに行くためだ。
福引き会場に行くと、他のお客さんが何人か集まっていて、ガラガラを回している。
「へぇ、これを回すと玉が出てくるんだ。面白い」
フェイトが目を輝かせてガラガラを見つめる。
「フェイト、あなた福引きって初めて？」
「うん。こんなの見るの初めて」
「じゃあ、最初にやらせてあげるわよ」
「いいの⁉」
フェイトの顔がパアッと明るくなる。

「別に良いわよ。それで当る確率が変わるわけでもないし」
券を引き替えて、フェイトがハンドルを掴んで回し始める。でもおどおどとしていて、ゆっくりとしか回らない。
「もう、もっと早く回さないと玉出てこないわよ」
「そんな事言ったって、これ結構重い……」
フェイトはハンドルを両手に持ち変えて、力を込める。今までよりも早く回り始める。すると、ガラガラの口から青い玉が出てきた。
「はい、青い玉当り！　四等ケーキバイキング券プレゼント！」
「……」
「うわぁ！　やったね、フェイトちゃん」
フェイトは息を切らせ、何が起ったか分からない様だったが、なのは達は祝福する。
「ふっ、ビギナーズラックって奴ね」
アリサは肩をすくめる。
「もう、そんな事言って……　アリサちゃんったら。じゃあ、次は私ね」
そうして、すずかが次にガラガラを回す。運動能力があるすずかは、ガラガラを軽々と回す。しかし、出てきたのは白玉。景品は参加賞のティッシュペーパーだった。
「……」
「どんまい、すずか」
アリサはすずかの肩を叩く。
「次は私ね」
「なのは頑張れ～」
「うん♡」
なのははハンドルを最初から両手で掴んで回す。自分が非力なのを分かっているからだ。その甲斐あって、ガラガラは最初からスムーズに回るが、結果は白玉だった。
「……」
「なのは、残念だったね」
「うん……」
「じゃあ、取りはあたしね」
アリサは腕を回しながらガラガラに近づく。
「ふん！」
ガラガラは勢い良く回った。カラカラと、小気味良い音を立てて青玉が飛び出した。
「やたっ！」
「おめでとう、アリサちゃん」
「これで、アリサちゃんもケーキバイキング行けるね」
「へっへ～ん」
得意げになるアリサ。それと対照的に、フェイトは余り嬉しく無さそうだ。申し訳なさそうになのはを見ている。

「なのはは、一緒に行けないんだよね……　だったら、あたしも……」
「そんな、気にしなくて良いよ。せっかく当ったんだから行かなきゃ」
　それでも、フェイトの顔は晴れない。アリサはまたイライラしてくる。
「あ～　もう！　はい、あたしのチケット!!」
　そう言って、アリサは景品のバイキング券をなのはに叩き付ける。
「アリサちゃん？」
「もう、見てられないんだから。二人で行ってくると良いわ！」
「アリサちゃん……」
　フェイトの顔が明るくなる。もう、憎たらしいったら。
「ありがとう、アリサちゃん。でも、皆(みんな)で行こうよ、ケーキバイキング」
「え？　でも、券は二枚しか……」
「二枚もあるんだよ。皆でお金出せば、半分の値段でケーキバイキングが食べられるって事でしょ」
「あ……」
　どうしてこんな簡単な事に気づかなかったんだろう？　チケットが二枚しかないので二人だけでしか行けないと思い込んでいた。そして、その二人がなのはとフェイトのペアかどうかだけに頭が行っていた。なのはは、そんな狭い考えをしていなかった。四人皆が幸せになる方法を考えた。
　自分が恥ずかしい。
　アリサは自分の器量の狭さを反省する。
「なのは、あたし達を太らせる気ね」
「ええっ!?」
　なのはが戸惑いを見せる。
「自分達だけケーキバイキングに行って、体重が増えるのが嫌なんでしょ。しょうがないわね。皆で体重増やそうじゃない」
　アリサの顔が赤い。照れ隠しなのが見え見えだ。
「くすっ……」
「何よすずか、何がおかしいの？」
「いえ、なんでも……」
　そんなアリサの様子がおかしくて、すずかが「くすくす」と笑う。

4

　ケーキバイキングは四人の楽しい思い出になった。しかし、それからなのはとフェイトは一緒に学校を休むことが

多くなった。二人の仲は以前にも増して良くなって行ってるようだった。

アリサは気にくわない。二人の仲が親密になる事だけじゃなく、自分やすずかに内緒で何かしていることが。自分達は親友ではなかったのか？　秘密なんか持たずに、なんでも話せる仲ではなかったのか？

その疑問が氷解した時、四人の仲間は五人になった。

なのは達が理由を言わなかったのは、自分達が魔法を理解してくれるとは思わなかったからではない。自分達を巻き込みたくなかったからだ。

水臭い。そんな事気にしなくても良いのに。確かに自分達は魔法を使えないので、一緒に戦うことはできない。それでも、何かサポートできるのに！

第2章

1

「はい、これ。こないだからのノート」
「ありがとう、いつも助かるよ。それにアリサちゃんのノート見やすいし」
「そう？　別に普通だけど」
口ではそう言ったけど、実は意識している。
なのは達が魔法使いだと判明して二年が経った。なのは達が監理局の仕事で地球から離れる時、そのノートを取るのはもっぱらアリサの仕事となった。
少しでもなのはの手助けが出来るように、なのはが授業から取り残されないように丁寧にノートを取る。小学校の授業のノートなんてたかが知れてるけど。
でも、なのはのサポートがノートを取るだけなんて辛い。本当はもっと色々手助けしたい。なのはは地球に戻って来た時の拠り所だって言ってくれるけど、それだけじゃ不安だし、不満だ。もっと直接的なサポートをしたい。
エイミィさんは魔力が無くても監理局の仕事をしているけど、彼女はミッドチルダの出身。管理外世界からの就職・移住はまず認められない。はやてが羨ましい。彼女みたいに魔力があれば。
（なのはは、あたしがこんな事悩んでるなんて、知らないよね）
むしろ知られたくない。

2

なのはが久しぶりに帰ってきて、一緒に帰る約束をした。委員会の仕事があったけど、待っててくれるって。だって一緒に帰るのは久しぶりだから。
委員会の仕事を手早く終らせ、なのはの待っている教室に向かう。
話したい事が沢山ある。ノートで分からない所があれば教えて上げたいし、なのはがいない間の学校の出来事、ドラマの展開、新しくオープンしたお店。一回一緒に帰るくらいじゃ話しきれない。
（まず、「なのは、お待たせ！」と言って……）
自分でも信じられないくらいうきうきして、教室のドア

を開ける。
「なの……」
アリサは言葉を詰まらせた。
夕日の差す教室の中、金色の髪の毛と栗色の髪の毛がキラキラと輝いている。フェイトが席に座り、その前になのはが居る。手をフェイトの頬に添え、顔を異常に近づけている。ただのお喋りなら、そんなに顔を近づける必要は無い。アリサの位置からはなのはの後ろ姿からしか見えないが、その分二人が何をしているかの想像が掻き立てられる。
フェイトの頬に流れた水滴が光るのを見た瞬間、アリサは何も考えられなくなった。

3

バサッ!!
何かが落ちる音に気づいて、なのはが振り向くと、教室の入り口でアリサが呆然と立っていた。今した音はアリサの鞄が、手から落ちた音だった。
「アリサちゃん？」
なのはが掛けた声は聞こえてないようで、アリサは何も答えず、青ざめた顔でその場から走り出した。
「どうしたの？」
「アリサちゃんが来たんだけど、なんか様子が変なの」
「なのは、追いかけて。あたしはまだ動けないから……」
そう言って、フェイトは涙を拭(ぬぐ)おうとする。
「駄目だよフェイトちゃん、擦(こす)っちゃ。涙で流れるのを待たなきゃ」
「うん……」
フェイトは鞄の口を開けて、手鏡を探す。涙でよく見えず、探すのに苦労する。
「ゴミが取れたら行くから、なのはは早くアリサを追いかけて」
「うん」
なのはは、フェイトを教室に残して、アリサが走って行った方に向かった。

4

「うっ……　ひっく……　なのはぁ……」
階段の脇で、一人の少女がうずくまって泣いている。
（あたし、分かった……）
窓から離れて薄暗いその場所で。
そこに、足音が近づいてきた。
「アリサちゃーん。アリサちゃーん、どこ〜」

廊下からは奥まっているとはいえ、何かの裏と言うわけではない。直ぐに見つけることが出来た。
「いた！　どうしたの？　アリサちゃん。こんな所で……」
「なのは……」
なのはがアリサに近づく。アリサは少し落ち着き、うるうるとした目をなのはに向ける。
「びっくりしたよ。突然行っちゃうんだも…　うぐっ!?」
なのはは目をパチクリする。アリサは、しゃがみ込んだなのはにしがみつき、そのまま唇を塞いだ。なのははアリサから離れようとするが、アリサが頭と背中を抱きしめているので離れられない。離れられたのは、アリサがなのはを離してからだった。
離れてからも、なのはは呆然としていた。親友の、それも同性からのキスに明らかに戸惑っていた。
「アリサ……　ちゃん？」
「なのは……　好き……　なの……」
アリサはなのはの目をじっと見つめる。
「さっき、なのはとフェイトがキスしてるのを見て気づいたの。あたしは、なのはの事が好きだったんだって……」
「私と、フェイトちゃんがキス……？」
なのはの表情に、さっきまでとは違う疑問が加わる。
「してたんじゃ、ないの？　さっき教室で……」
アリサの表情も変わる。
「してないよ。さっきは、フェイトちゃんの目にゴミが入ったから、それを取ろうとしてたけど……」
さーっと血の気が退く。目の前が暗くなり、体が重くなる。アリサは、ふらっとするのを、なんとか押し止める。
「そんな！　じゃあ、あたしの勘違い……」
アリサはガックリと項垂れる。
「そうだよ。だから……　うふっ！」
なのはの口が再び塞がれる。なのはは一瞬面食らうが、直ぐに冷静になり、腕を伸ばしてアリサから離れる。今度は腕を掴まれていただけなので、簡単に離れることができた。
「でも！　あたしがなのはを好きなのは勘違いじゃない!!」
「アリサちゃん……」
二人は暫く見つめ合う。こんなに真剣なアリサの目を、なのはは見たこと無かった。しかし、なのはは重い口を開ける。
「ごめん……」
「……」
「アリサちゃんは大事な友達で、『好き』なんだけど、違うの……　やっぱり、女の子同士でキスしちゃいけないと思うの!!」

そう言ってなのはは身体を返し、その場から走って離れた。後には、悲しみに暮れるアリサが残された。

5

翌日、アリサはトボトボと登校する。すずかが理由を訊いても何も答えない。リムジンの中でも、ずっと俯(うつむ)いたまま無言だった。

教室の席に着くと、暫くしてはやてがやってきた。

「アリサちゃん、なのはちゃんまた仕事やて」

「そう……」

アリサは少しホッとした。これで暫く、なのはと顔を合わせなくて済む。これから、どんな風になのはと付き合っていけば良いか、考える時間が出来た。

「なんや、元気無いなぁ。うちのヴィータも一緒だから、心配することなんてないよ。ちゃちゃっと終らせて、直ぐ帰ってくるから」

しかし、なのはは帰って来なかった。

第3章

1

高町なのは負傷。意識不明の重体。
その通信が入った時、授業中にも関わらず思わずはやては叫んでしまった。通信だけでは詳しい状況は分からない。早く監理局に向かいたかったが、はやてには一つ仕事があった。それはすずかとアリサに伝えることだった。授業が終ると、真っ先に二人の教室に向かった。
「そんな……　なのはちゃんが重体……」
すずかは、それを聞いて倒れてしまった。アリサもふらついたが、何とか意識を保っていた。どうにかすずかを保健室まで運ぶと、アリサははやてを問い詰めた。
「どう言うこと!?」
「うちにもまだ詳しいことは分からへん。今から監理局に行って確かめてくる」
「あたしも……　あたしも連れてって!!」
「無理や！　肉親ならともかく、友達ぐらいじゃ許可が下りん！」
「そんな……」
アリサはその場で泣き崩れる。
「心配しいや。なのはちゃんきっと大丈夫だから」
そう言い残して、はやては監理局に向かった。

アリサは、一層無力感に嘖(さいな)まれた。
自分は地球で祈ることしか出来ない。お見舞いに行くことさえ出来ない。それに比べてフェイトは付きっきりで看病できる。

ヴィータが事情聴取を終え、地球に戻ってきた。ヴィータも本当は付きっきりで看病したかったが、地球に残っているなのはの家族や、友達に状況を伝える必要がある為だ。ヴィータとはやては、地球に戻るなり高町家に向かった。
高町家のリビングで、恭也と美由希、アリサとすずかが集まっていた。士郎と桃子は特別に許可が下りて監理局に行くことができたが、恭也と美由希には許可が下りず、地球で待機していた。

「ごめん、皆！　あたしが！　あたしがなのはを守らなきゃ行けなかったのに!!」
「そんな、ヴィータちゃんの所為じゃないよ」
　美由希がヴィータを慰める。恭也と美由希は意外なほど落ち着いていた。事件から日数も経っていたし、家族が重篤になるのは二度目だったからだ。
「それで、なのはの様子はどうなんだ？」
「まだ、意識が戻らねぇ……　それに、戻っても完全に回復するのは難しいだろうって……」
「そんな……!!」
「なんで……　こんな事に……」
「そんなに強敵だったのか？」
「強さはそれ程でもなかったんだけど、不意を衝かれたのと、その……」
「何だ？」
「なんか、悩んでたと言うか……」
「……!?」
　アリサの顔が青ざめる。
「あたしの……　あたしの所為だ……　あたしが……!!」
「どうしたの？　アリサちゃん？　何か知ってるの!?」
「あたしが、あんな事しなければ……！」
　ルルルル……
　その時、はやてに通信が入る。
「なんやて!?　ほんまに!?」
　はやての顔がパアッと明るくなる。
「なのはちゃん意識戻ったやて!!」
「本当に!?」
「わあっ！」
　部屋の空気が一転して明るくなる。
「ほな、通信繋ぐで！」
　高町家のリビングと、なのはの病室が特別に繋げられた。しかし、リビングはさっきまでの歓喜が嘘のように静まり返る。スクリーンに映し出されたのは、包帯で全身覆われた姿のなのはだった。
　恭也と美由希が包帯巻の家族を見るのは二度目なので、さほど動じていない。しかし、平和呆けしたアリサとすずかにはショックが大きかった。すずかは口に手を当てたまま固まり、アリサも涙を流した。
《ごめん、失敗しちゃった……》
「全く、闘いの時は気を抜くなといつも言ってただろう」
《うん……　ごめんなさい》
「もう、心配したんだから。次こんな事が遭ったら、魔法少女させないから！」

《うん……　気をつけるよ》
　これが戦闘家系高町家なりの愛情表現なのだろうか？
「なのは……」
《ごめんね、心配かけて》
「ごめんなさい……」
《どうしてアリサちゃんが謝るの？》
「だって、あたしの所為でなのはが怪我して……」
《アリサちゃんは関係無いよ。私が不注意だっただけ》
「でも、あたしがあんな事しなければ……」
《それ以上言うと怒るよ！　げふっ！　げふっ！》
「なのは!!」
　急になのはが咳き込んだ。皆がモニターに食い入る。まだ長時間の通信に耐えられる位回復してないようだ。
《ごめん、もう通信切るね》
　そう言って、フェイトが通信を切る。
「……」
　重い空気が流れる。
「なぁ、アリサ。お前なのはに何したんだ？」
　アリサは答えず、俯いたまま。
「おい、答えろよ！」
「止めい!!　ヴィータ！」
　ヴィータがアリサの胸ぐらを掴むのを、はやてが必死に止める。
「くっ！」
「こら待て！　逃げるな！」
　アリサは部屋から逃げ出した。ヴィータの怒号（どごう）に耳を塞いで。

2

　その翌日、アリサは学校を休んだ。すずかは携帯に掛けてみたが、出ない。放課後家に行ってみても、門の所で断られた。
　さらに翌日、再び休みかと思われたが、アリサは始業ギリギリで登校してきた。しかし、その姿にクラス中がどよめいた。アリサは、髪の毛をばっさりと切り落としていた。
「アリサちゃん、どうしたの!?　その髪！」
　一時間目が終ると直ぐ、アリサは女子に囲まれた。
「ん～　ちょっとイメチェンしようと思って。いいでしょ、この髪」
「うん。可愛いけど」
「でも、ちょっと勿体ないよね。せっかく綺麗な金髪だったのに」
　アリサは明るく振る舞っていたが、それが空元気だと言

うことは、すずかには直ぐに分かった。すずかは、昼休みの弁当を、教室でなく屋上で食べようと誘う。
「もう、どうして屋上でなんか食べるの？　冬なのに」
「今日は温かいよ。それとも、教室で話をしたい？」
「……やっぱ、すずかには分かったか」
アリサは柵に手をついて、空を見上げる。
「あたし、なのはの事忘れようと思って……」
「なのはちゃんの事忘れる⁉　そんな‼」
「あ、そういう意味じゃないのよ。なのははずっと友達。そう、友達……」
アリサの表情が陰(かげ)る。
「何が、あったの？」
「あたしね、なのはにキスしたんだ……」
「キス……　ええっ⁉」
すずかは驚きの声を上げる。こんなに驚いたのは、なのは達が魔法少女だと判明した時以来だ。
「なのはとフェイトがキスしてると勘違いしてね、焦ってあたしも……　そして玉砕」
「……」
「当たり前よね。女の子同士だもん。で、それがあの日の前日」
「それじゃあ、なのはちゃんが……」
「そ、あたしの所為」
アリサは、それまで空を向いて話していたのを、すずかの方に向き直す。
「嫌いになった？　あたしの事」
「そんな事……」
すずかは正直戸惑った。親友が女の子を好きだという告白、そしてその為に親友が重体になった事にも。
「だから、あたしはなのはの事忘れるの。だって、誰も幸せにならないんだもん」
再びアリサは空を仰ぎ見る。
「それで本当に良いの？」
「……」
「本当に良いの？」
「だって、どうしろって言うのよ⁉　あたしは振られたのよ！」
アリサはすずかに向かって泣き叫ぶ。
「それに、仮に両想いになっても、一緒にいる時間なんて全然無いんだから！　なのははあっちの世界に行きっぱなしで、あたしは地球。今度みたいに大怪我しても、お見舞いに行くことさえ出来ないんだよ！」
「……」
「地球で帰りをじっと待ってるだけなんて、大和撫子なす

ずかには出来るかもしれないけど、あたしは無理!!　出来ない！」
　ボロボロと涙が溢れて止まらない。くしゃくしゃになったアリサを、すずかはそっと自分の胸に抱きしめる。
「分かったわ、アリサちゃん……」
　すずかの制服が涙で濡れていく。その染みが広がらなくなった頃、すずかは優しく囁いた。
「その顔じゃ、午後の授業は無理ね。先生には言っておくから、早退した方が良いわ」
「うん……」
　アリサはコックリと頷く。

　すずかは、アリサを見送るとひっそりと呟いた。
「待ってて、アリサちゃん」

3

　すずかは、月村邸の地下室への階段を下りる。今の屋敷よりもさらに古くからあるようで、電気が通っていず、燭台(しょくだい)に灯(とも)る蝋燭(ろうそく)の明りだけが頼りだ。
　重い扉を開け、中に入る。そこには古い文書や、様々な形の器物が並んでいた。その中から、一振(ひとふ)りの日本刀を抜き取った。

「何？　すずか。用って？」
　その日の夜、すずかはアリサを呼び出した。
「こっちに来て……」
　すずかは敷地の奥の、余り人が来ず、それでいて回りに何も無い広場に案内する。
「ここなら良いわね」
「だから何よ。用って。それにその手に持ってるのは何？」
「アリサちゃん、二年前、なのはちゃん達が『闇の書事件』って呼んでる時の事覚えてる？」
　すずかはアリサに構わず話を進める。
「覚えてるわよ。忘れるわけないじゃない」
　そう、あれ程強烈な事件、忘れる筈がない。なのは達が魔法使いだと初めて知った時の事だ。
「あの時、私達は結界の中に取り残されたんだよね。どうしてだか分かる？」
「どうしてって？　何かあるの？」
「あの時の結界は、魔導師や使い魔だけを封じ込める結界

だったんだって。だから、普通の人は結界の中には居なかった」
「そ、突然人が消えて、誰も居なくなって……　あれ？」
何かがおかしい。何か矛盾がある。
「気づいた？　アリサちゃん。私達にも魔力が有るって事なの」
「⁉」
アリサは呆然となる。衝撃の事実をいきなり突きつけられ、どう理解して良いか分からない。
すっと、すずかがアリサの眼前に日本刀を差し出す。
「贄殿遮那（にえとののしやな）。我が家に伝わる宝剣よ。覚悟があるなら手に取って」
アリサはゆっくりと手を伸ばす。
「これを手に取ったら、もう元の生活には戻れないわよ。それでも良いのね」
一瞬手が止まる。しかし、一口唾を呑み込んだ後、アリサは叫んだ。
「あたしは、あたしはなのはと一緒に歩きたい！」
アリサが贄殿遮那を掴む。その瞬間、贄殿遮那が強烈な光を放ち、物凄い突風が起こる。とても目を開けていられない。しかし、アリサは贄殿遮那を睨み付ける。
「うおぉぁあーっ⁉」
叫びと共に、アリサの目の色が灼眼となる。髪も炎髪に変わり、なおかつ腰まであるような長髪となった。
「これで！　これであたしは⁉」

あとがき

皆さんごきげんよう。PARALLEL ACT 主催者 TomOne です。

えっと、コピー誌（正確にはレーザープリンタ誌）出すのは久しぶりな気が。最近印刷所に頼んでばかりいたので。

今回、薄くなりそうなのと、時間も無いのでコピー誌です。なにより、今回プレ版で、この本に加筆修正、絵も付けて出す予定ですので。なら買わなかったという方ごめんなさい。

元々の予定はアリサ×なのはで、同性愛と遠恋に悩むだけ～な感じの筈が、何故かバーニングアリサの序章みたいになってしまいました。おかしいなぁ。このままバーニングアリサを続けるかどうかは自分でも良く分かりません。好評、かつネタが浮かべば書くかも。

しかし、予定は変わる物ですね。アリサの苦悩は最初なのはに話す予定だったのが、すずかに話してるし、なのはとフェイトのいちゃいちゃっぷりをもっと書く筈が、あんまりいちゃいちゃしてないし。正直そう言う甘々なの書くの苦手です。他にも描ききれていないシーンがあるので、そこら辺を重点的に加筆修正しようかなと。

と言うことで、ちゃんとした本は夏コミの予定です。オフセは無理なので、オンデマンド印刷で。でもコピー誌もオンデマンド印刷の筈なんだけど、なんか良い呼び方ないかな？

そして夏はコピーでざんげ、と言うか白亜本を出したいかなと。秋から冬にかけて、蔦笙…と言うより笙蔦本出そうかと思ってます。

その時はまたよろしくお願いします。それでは。

’09年5月2日

TomOne
1975 年 6 月 28 日、熊本生まれ。蟹座、O 型。過去に『新世紀エヴァンゲリオン』『家なき子レミ』『救命戦士ナノセイバー』『学校の怪談』『天使のしっぽ』『電脳天使』『マリア様がみてる』『かしまし』『コードギアス』の同人誌を発表する。

あたしは無理

PARALLEL ACT SERIES

2009 年　5 月 3 日　第 1 版発行

★定価はカバーに表示してありません

著　者　TomOne
発行者　村上智一
発行所　PARALLEL ACT

URI　http://p-act.sakura.ne.jp/
E–Mail　tomone@p-act.sakura.ne.jp

印刷機　あなたのプリンタ

Printed in Japan

造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替えいたします。まずは、当サークルにご連絡ください。
送料は当サークル負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したもの、自ら印刷したものについてはお取り替え出来ません。